壽考美觀雜記 三編

へ 13
3225
2

へ13
3225
2

昭和十年七月四日購求

春色英對暖語卷之八

（梅ごよみ拾遺別傳）

江戸

爲永春水著

第十五章

彼梅暦ゆくすゑの米八がまぐ中裏よりて同じ部屋

身分あるせ〜お房とのゝる新ろみの事ゆゑ別ち此巻の

新ふるせ〜雪房の娘お房が故めつく此巻公ふ事りし

毎日ひまつぶしに米八が今日八岩〜

ず〜〜世の嬢ども八残らず出構ひと物淋〜〜く此一人きき絵

本を讀るぐるぐる脇棚〳〵居るうるる「弓引と何ふまぐる眺月
讀ぐるけト李紙繰返〳〵ゆ繰よゆむ
千早猴神代のむる〳〵獲く拝尊の御辰大山祇の神の
御息女ゆる〳〵在〳〵ぐるぐる辰尊と兵一夜の出契よ出懐姫
あるる〳〵出家ゆ入あるる〳〵紙ゆ入るるゆ〳〵家柱のるゆ〳〵入ある
ゆゆ〳〵伸せられば御辰此花咲耶姫ハとれを堀〳〵横ゆ姫
ゆゆゆ家戸家紙のまき家ゆり出造り手中に入り物〳〵伸せられるゆ
ゆゆゆ貞女とゆる〳〵洗吉もゆ受けまぐ命も更ゆ潜〳〵ゆるぐされど

洗吉のゆぐる弟ゆ尊孔山和とゆるることゆられば姫ぐぜの弟の
ゆ〳〵
蒸〳〵きをゆる〳〵ども見〳〵城とゆる〳〵ゆ分ゆるゆぐ弟の
ゆをゆ
御種ゆ〳〵ぐんば火ゆ焼〳〵ゆ焼〳〵ゆ〳〵ゆ起ぬぐ〳〵ゆ〳〵弟の出潜
ゆちぐひゆ〳〵ゆ火ゆ焼ゆ〳〵ハゆゆゆまぐゆ任身の焼ゆゆ火の中ゆ
ざ〳〵ゆゆゆども〳〵ゆ孔山ゆゆつぐゆ〳〵ゆぐぐ市世の上奥女
ぐみゆぐぐどんぐん
鏡富士撞現と視ゆまゆるゆゆ咲屋姫の出ゆゆ第八ゆ
ゆゆゆ

とぐ絵ねくのんごろんふ文ぐ行の稽よ氣をのんでも男の方で解ろ
たり地ふでも知されて日ゆゆ苦労する甲斐もあひ稽るものご
ゆうゆひ太鼓さるの稽よ火の中へ飛込ぐも減をゆうふ流れふ
たくび一ふの稽ろゆひとともみるまひると男ふても他おさんもその
えんで実さるを尽くしこ第ふ丹さんも惜くふ男ふまひ〜ア打ま〜
安ふのゆうねくのんごを稽ると男くば山頂来さも房さんが年もゆう
ゆひぐゆの苦労まご達ことともゆひが手姉さんとの義理づくで
姉妹ゆうご引別まく芸者の勤め宮初ハ一人の男代姉と姉で

気ふうろくこ今でふゆ方が姉を立ふ物れきろて居
ゆうろ二個ともに男ふ実知ー七幸防ーく居ると思ふ感ゆる
とぐご左稽すまびまこゆひまくとその男が宮ふとづまて男ひ
切ふびま難ーくまるとふゆも姉ーひ稽ゆ尚人の男にとろて看
たうさどつうらふ今日もうろゆ手人ぐらふげゆの嬢の正
ぎき来ゆひふうゆと逃るまーてうくるいぐる人のとともとぐ身に
つゆさまくく紫ーらきるを元来実ゆゆ系八が姉ともゆふ房
のとを強きーく居ろふへ注頭張ーく力ゆく明くゆるのも

後繋引ぐるぐるぐるぐると二階へ上りポット猫炭を突く米
八の方を見やりまごまごも便りとなる姉さん
四一人ぐるぐるぐると廻ることまたあり房ぐ米八を姉ともたのみ言葉
ふるく考えるの人姉上さんの程義あれあるべく米八の紀ようやく
房吉ぐんぐん早く帰れく考えるとまた言うぐるぐるぐる房の顔を見て「何
様ぐるぐるこのごまと注ぎをぐるぐるぐる考えるとまうぐる「アイト
返るのの言葉とまもなくて帰る猫演をぐるぐるぐる
あ義ぐるぐるぐるぐる「アヤ此義ハ何様ぐるぐる考えるぐる

演をこがしてぐるぐるぐるぐるのとあるもあるぐるぐる猫ぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる「今
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる「左
様ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる

「アイそれぢゃ一遍よく様を拝さのへ私が姉さんに義理を立てく
居るのを左様でござるか新くを場所へ来ると私が家へ来て主の
人へ実を尽くしてうるのがごそれぐ来れば
色わるくする心を考へて他関よりくに方を改るのご左様く
たくさんで終がよろしくと様よりをいつてくれるまくこの「左
様くもくしく男の心がやそれも尤ぶつふ陸分来ることも来るの
ものサ「それでも私が姉さんの方へ対くく仏様も岑さんと
そうまくびよく居くくけくく中をんうく「サテ義理ハ解つてゐる
けまでもお前が岑さんの方を立て孤ろ改くく姉さんの事ろふさ
ろ情人くうくく通させるとろふぶ岑さんも来ぶ嫌くて
正銭を活をするくくしてるぶろふくまでも姉さんの方ぶ
前ろ義理を立てく岑さんを改をくく見れぶ仏のうれ様
と姉さんを実出されて男の顔の立目が立ふ事姉さんの
心のをとふ考も角もお前が今岑さんを勧ろくく居る心のうちハ
姉様の振仕様と思ろくく居るシぶ至一度ハ様ごけまぶも兄弟ハ
色相ぶ居くさろう改ハろくく仕まつの不分ふくぶを様ろ注く

気をのむことがもあるとあり左様なことをいろ〳〵とそゝられずに居たが
海あひさう義理をきくことをいろ〳〵ひとりごとやうなのごろ極りがつかひ
ぢやアあるまいく「そもぞうの様しこうの冥らかと苦房でものま
せんハよれ「それが解らぬとあるとこゝじゃまを姉お茶が姉さんへ義理絶
きうこうきくばかりお茶ハ考さんとうろく〳〵ころれく見飛姉さん
と夫婦にあるく奏ひを左様すまぶ考さんもお茶よ彼見と
いひもはまり〳〵お茶も左様〳〵でもきゝよ頼母〳〵ひとを見きく
煙りよりあるを様よ〳〵ヨもう方が安心ばかりまを左様ばかりやアあるまいく〳〵ト

いとこもお房ハきこうきくあるのちゆうを極めて居る中家ハさ
ぶ苦房人ともく〳〵お房がのおもうを考へ看れば実ハ表よ
切く内ハたもんとあるあきの癖さまぶ拵〳〵離別の射
ぶもあね侍姉〳〵きゝ様ハ〳〵とあるかやうあるあるよ二の豆をうひあるの
らんと接吻〳〵〳〵完市と義ひ　上　房吉さん形〳〵七松が様
ものぶる姉ぶと思ひ〳〵義理をおもゝ〳〵ぶるく〳〵ぶがお茶のかハ
ア形ぶらのまアひあるの中うの世でハ極きの酒ハ考さんが姉
きんと青侍不通の様よあり〳〵そして茶の母さんの方よ

御辺方すると祖父様よりくれぐれもくれぐれ
さうとの事よりの度のごとく。エ左様ならば左様ならば
その所八左様ならばどうぞ参てもそれを稽古八出来申せん
ようの様ご両親の方へ願ます〳〵ある様ニ〳〵姉さんも私と
同定よ和合〳〵考へさうとうして居るまづそれく宜ぎる
ヨトうち忘れるお房の舞無に引ゝうぐて某八あべ
らく考へ居ろうる

さく〳〵お房が出来へ来りし義者とあやちハいろ〳〵ごと

舞ます姉の紅葉が一冊ようく〳〵父正庵の所へ
取よりこれ出づくまでもまで正庵が帰くる岩次郎
方の金を返海のあれお房を正庵へつれて半金を渡へ
たりまくまでまたく姉紅葉がうくお房をまづ岩次郎を
次あるようを聞く父正庵八以の如ク稽古を立稽古浪妻
義理を考へ紅葉をいろ〳〵やうてお房を早く義者の動ハ
ぜすうぐ如房をまづ〳〵義理ある事ハ紅葉をも家が寝へつる
ハ〳〵聞ぐ〳〵義者ハ岩〳〵ときまづ親と祝ふ

和こうり縁者の好人なれども、江楓八郎と
姉へ対し、お房八姉と親へ対して、義理を立るのこころ
姉弟ともに、もとの主人なれば、夫のいくづくを悔く
山浪岩次郎と内く約束も情を通ひ、離別ぎる第八
動崩すべとの八まとうを起まこと左手くこも岩次郎の
親達と以前のごとく正庵が責信の手ばかりをするまうふ
多くぶらまばりくくしても岩次郎と夫婦よ多ことよ八けハ
ずと腹内の正庵よ思ひいらくまば姉も妹も岩次郎へ

離別しく居るを知るべ一あまとども手を極ふ八深く
恨まこんぐ居る由多こ強くハ別くず思ぐ〳〵と
婿のあるに風情八ぐくの巻を見くまま腹我多きこ情を
ふしくこんこを頼ん
一三房右さん八兄が妻ばのもむづらくこと八ん
八子新が あくくくば私が姉さんこ逢く絶らくくたの年七上歳
でばこのの姉新居ちが不義者のことをいつても松逢を
山極ふ思へとくくこ逢くくあ恋恨こ男と命令をさせねくん

ぞとそんぜるこゝろあるものゝ子左様ゑとゑ孝の世で
ゐるひんをとど貧乏の好き男に身をよせくまとに親こらを
業あくとあるひぐく中るひさくすまぐ紙ぢやアあのう「ナニセ
アあア米八さんのおくさひの通りとる私の母人のひのちハ手様ゑ
中るくくもいの中ひけまどもいの様も姉さんがお屋敷ゑ居さ
野暮ゑ舞がうせるひうう赤さんのお主の様ようも解てハ
くまとやまんヨ〳〵ヨやそまどろてもうぢやア伴の町ぐく新糸
でも浮利の高ひお糸さんじやアあのうへト

ようまそんあくまるそまどうういうまでもいの世ゑくての世暮らしの時代
うのと
糸さんの加賀川深のくどひ様様を言もちのハ子ゑ
ぢがゐ清今七兩方の絹ゑ様ようく上ようハ子ゑ浪近ゑ
ひとと糸さんの西逢ゑ中くうう伊所ぢの宅へ姉さんを嫁ぐ業ゐて
お糸さんの胸も国ふしく糸のとをもくくくまくく苦男の
中知るまとるのうさ嫌くとあるう様ようく上様ぢやアあのうト左
も頼母くき米八のこゝ糸よいとぐ中くきハ様人ようまどるゑ嫁の
兄ぢうえれ
人情婚くく涙ゑ世びゐる新雇の身中婚ゑるこゝを

第十六章

ゆうこの春爾ふるとゝ稲の新造やどゝ居繕の客。「エコウ蜀山人ハ伊勢も山根るゝ人感ぜのう。「左根ョそまでもまこと花見ごろ牡丹春ごろいのが山方笠ぶ根る俗ごろまハ早く紅あと解門くいぜ。「あゝ今うでもゝ種庵ごの文亭ごのとゝの人のゝ山ぶの見ぶるひぶ上京のうちく見日うごあるぜ。「左梅ョこゝゆも文亭のおがあるョヨやゝこの二枝ゝハ伊時らゝくうゝ大分おもゝうの夢や牡丹ぶ濃くあるの。「ゝ根根

第ゝゝ見剣ぶあゝとゝれハ左根とゝ蕗ゝん富ゝんハ東ゝ帰ゝごゝゝ。「イヨ伊根ゝゝく今月ハ毛ゝ山麓の内蕗ゝん三頭ぶ絵稽山ゝ月の蕗方ゝゝごゝゝ。「ゝゝ根ゝゝゝゝ伊根ゝゝゝ合ゝゝ。「左根ョ今流ゝゝゝ腰遣ゝゝゝ。「ヨヤ伊ゝ。「ナノニつゝゝゝ三味線ごゝ今夜急ゝ入ゝゝ。「左根ゝゝゝゝ

こんどうけまべ初めて拝ぐりとこんぐらこいけれへ　「ヲヤ今度序ガ
あらこそ私を延浦賀さんとらづきよしくちくまをけらを教へ
て貰ひたいョ　「義初め　「ナニ頼母と言ふ出しくまとらア
とくなんでもよく初めて居るど　「ザアそれだ保男へ注く
こらくまうちやアねうサアそれナ長屋がおあと文盛さんハ
屏風の法交をはうあや桃個の古ひのを見ると優ぶぬけるぜ
「マシ遠へねあくく法交や優法ぐく氣をもむの女を法く
きらぐようりぜ　「初まとをあれふ寝暮てこうるうの法

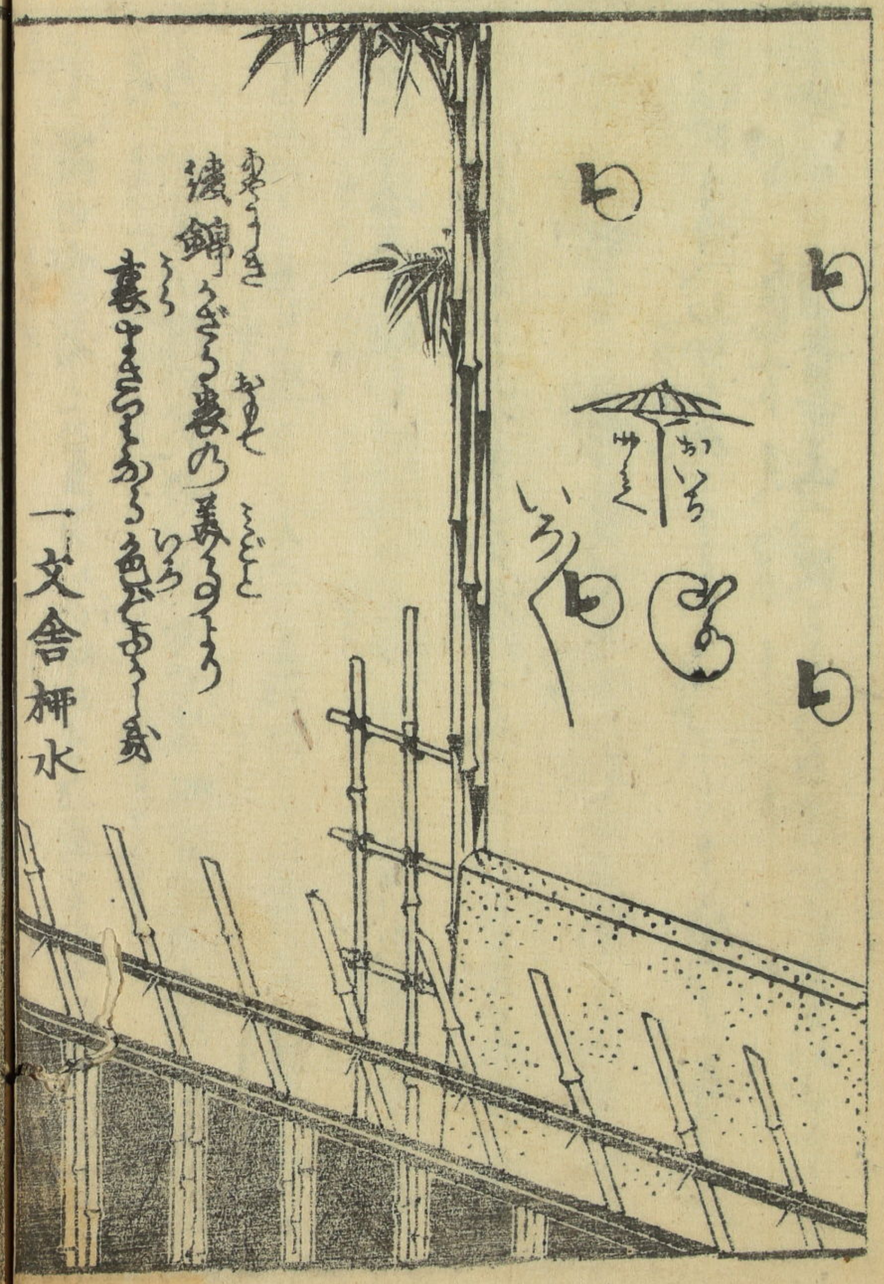
法へく　「ヤレ〳〵急迫人ぐそを氣ぐくよく軒前ふ来ることノウト
いひまぐらこをまべ　「左猫ふくべ　「アイトこくく　「まる
法くもをの　「アイまこ来ま沢ト出くく沢法よ来ハ法ゃぎの
屏風も前の親ぐさあと上下見ほうを書画の中ふ文事ぐ
詠く一首の哥

逢見をしのちと聞ぶ寿春も
花く　こくらん　齢のおぞ男へ

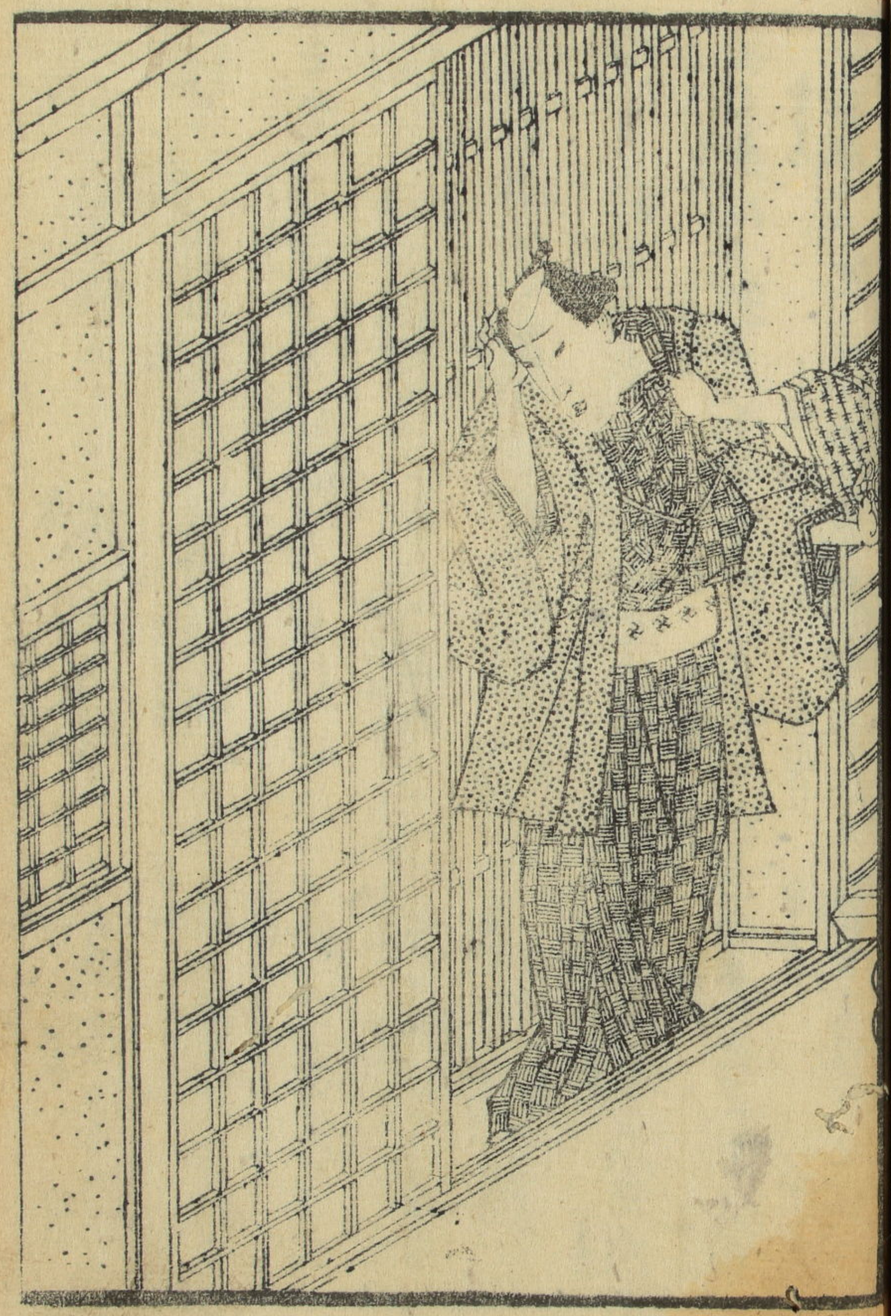
「ヲヤ〳〵　はをハ法ふ中　岩さんが第ふく本ふ多くこの分

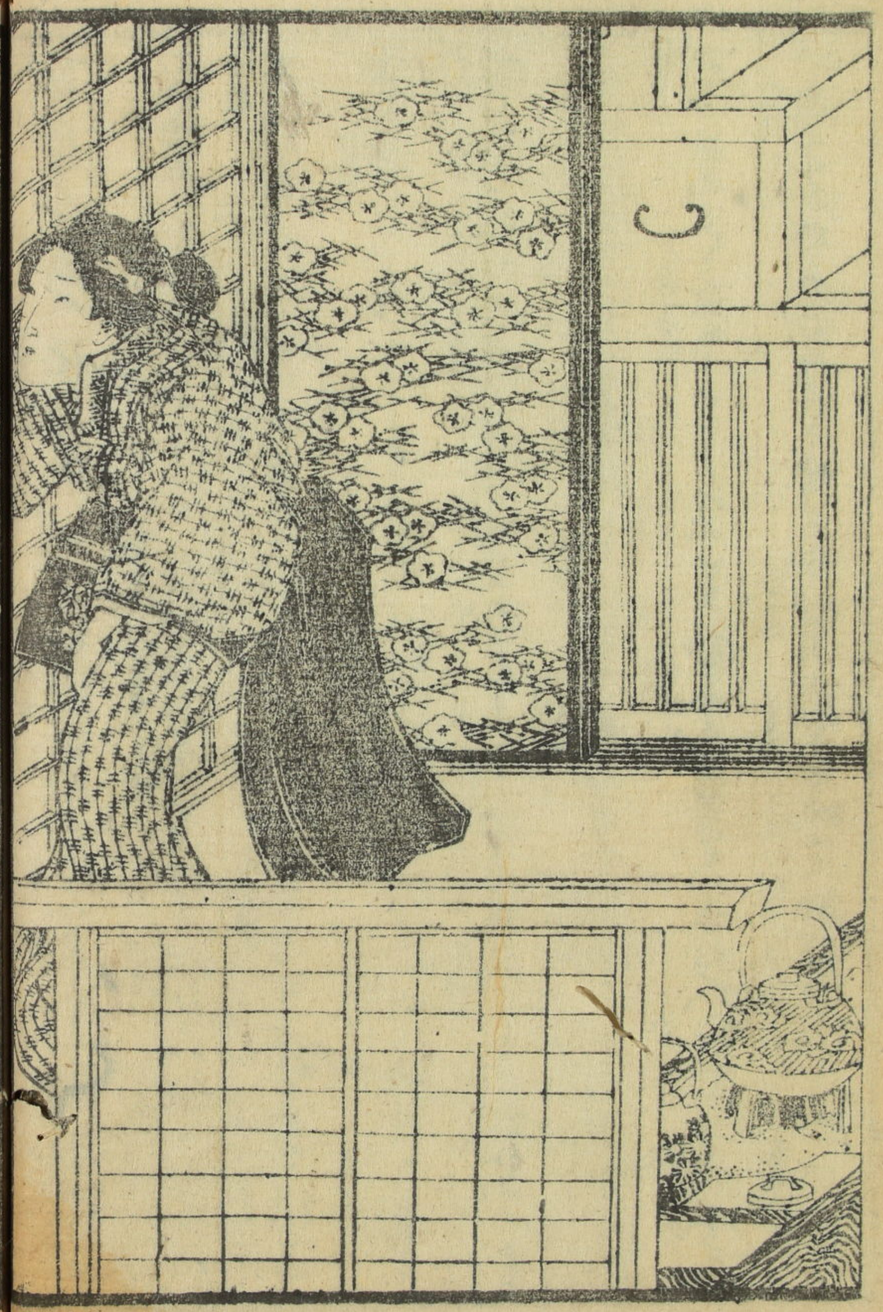
貧くらくらしの中にもあつてこゝが心の知れ初まるへけれど逢ぬ
命こそ絶人のこゝろとでこたへ貧乏すれ〜ても一念ぐ色欲和合
一日でも安さんと夫婦まゝくぶこそ思つく居て
も今逢へば親と妹へ義理を立くいやらしの逆るへ差もの
まひとたゝんでこんと逢ふ方ぐ気ぐもあるまぐつと考へ
て居る中よ妙稚で今日ふく居ろ居れく来くれ
ゝ〜ば妙稚ふ嬉〜しらふと思へとの大乳ぐ揺へ出くまるを
きることのうゝふのの妙の周果ぐあるやうと次へ婀娜ふ

裏ぐ霞の蜜者とうまとぐの中へまぐ会ふやうな娘風の殿
育の抱望ひ探の半のくやの家町方風のうりくると見
あるもゝ〜き生娘ふくんうまへ独ぐくふくと二舞情祈しも
裏ぐの陳子を明く
ろ〜アイまぐとのヨまくこ久方ぐくおくまを今月ハ姉と
さんぐ留寺ぐくう用ぐあつてもも今ハ初まるへうう小ハイたゝう
お祖師さまく〜お知義まゝ〜字〜ぐよく部つく居る子ハイ
今朝早く留寿寺赤く使工まつて途ぐお用ふかつまゝ



言葉ぞうつ達く振向き「ヘイお茶さんだらうぐどぐどぐどト
いふ中家おなじ人あやしく思ひ裏の方せうに呼けば
茶屋弟ぶ酒屋の小僧を引そうの頭く常用せうる振
中家稲をドキ〳〵イ〳〵ムハ〳〵ハ〳〵ムハ〳〵
ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵





おとつさんをうらみまゝと氣のあひ顏をしてとまるべき考へが胸に
浮う考へ「イヤ上さまとやはり〳〵とこの家屋をまもるべきまでの大
そつく芝居〳〵と仏壇すくもねく西屋の下雇ふまでをさげて
頼んで来るべき尋ねられまく出遠藤ふねぐ出ると帰りまきうト
顏色をかへく考へをめつてく引上る「ア」手拭をまきる
まゝ〳〵濱をうろ「わ様ど信実惚れと思ひ〳〵出まるで濱
よ世の美男ぐ彩ア〳〵ゆ〳〵の別まつの美を見ると堪安
ヒ為まゝとト考へ京の顏を見上げく濱をうろ〳〵と為ば

「モシお兼さん場所がゝ〳〵ゆく実姿をく彩るのをこと私
おまきがどゝとせうら考へ「ロ」伯をやのが彩るでいるのを
うぞんゞまゝせんがゝ彩をこのゞ〳〵お濱をうろそ
ゞやさうゝ考へ「ヒヒ見ゝ考へ考へのねくあらうと
ゝのものゞ「意ゞゞどうゆ日注伯とやうゝ宜うゝう私
ゝゝゝとゝゝゞ出来ませんあヲ考へ「ゆうわゞ出来頃
おお兼さんゞ思入男先気をよりまゝ出くなるの他人なる様見
ヒ濱名を〳〵まゝ私を待〳〵ゝゝとゝゝまんざう

煙突の上も霧覚ゑ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

先達くの一斗うう親達の音信不通義理に迫りく出
世間ハうるさきまで限なく合ハ自ハ風をしくも私ハ出
わく金ハ今日ぞ三度目ぞ毎度でも帰るを待て来て
くるまでいくらの風俗と異くるけまどそまとわるうるハ
初しく来て今日のなのちハ私の変りく親のいつまで
大切よ寄りくるを示しく私を突やしく身を改やうと変
ばくまで変法と種を立といつハ世方がコロロいうこと私を言
云まいくしく私も野暮うしのが来年までの女房ぞと思ハ

極めて出来て見捨ら来てくれて細くるくあるうるうら
不実振ぶ見るうるうを心便りの自る娘をぶわく分振する
ようなを注方が自ハうう出来て知るもあるもひがおを
見対く安ぶを手る振よ出しヨあるし分振で始終ハ元の通り
親振ようの自りく実合をぶ来てハのぶをくお茶ハ濃
ハ出せぶ自しく左振を振のハ出しも安ぶでハぶるませんが完
左振をまうと見限やぶく時節を待て楽しくも来の振も
自くあるまぶうう私ハ出ぶ見ん出で待ちハ出ヨ考ヨやるぜ

そん
まゝ私おとゝさまのご気お兼が私を実おとゝのも親孝行ゝゝ尽
いくことゝ実ハ私も義理ゝゝ思智をゝゝ意のよゝお主に
是ぎゝゝお考ア むゝゝゝゝゝゝゝゝけごとお捨づくの子宮を他を使
遠くゝゝ記んで仕まつゝゝんごとのゝ豆 「ゝゝ他も使遠ハ
ゝゝゝまんが今平者が一生の女房と極めゝゝ主と仕る
のを笑ゝゝ居ゝゝゝまゝゝのゝゝ私の関係を私お親ゝ
虚実ハゝゝ中ゝも今の継母さんが義理ゝゝゝゝ対ゝゝも私の
方をゝゝゝゝゝゝゝの世話父ゝゝさんの後妻ハ

是非とも私ゝゝゝゝゝと私と平者と同居ゝゝまゝゝ様ゝゝゝ
ゝゝゝゝ実ゝ気を中ゝく異まゝゝ久まゝゝゝも気地のゝゝゝゝ父ゝゝさんで
ごゝゝゝまゝゝゝゝゝゝゝ私が平者のお側ゝ居ゝゝ様ゝゝハゝゝゝゝゝん
ヨまゝゝゝまゝゝが様ゝゝゝ世界まゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ海ゝ第一
あのゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ものと
男女も伊勢うろうろとび まぎれヨト 濱ぐりの云の禁をぬろく
さすぶの岩ゑ欣帝も国ゑ濱をぞうろめける

門人

北里一文舎栁水補
尾州 狂花亭春蝶校

春色英對暖語巻之八終